

波、炎、怪物、蒸気

『メアリ・バートン』における労働者階級の表象 ^{*}

鈴木 美津子

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-1865) の『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848) は、苛酷な30年代と飢餓の40年代の工場労働者の窮状、惨状をリアルに描いた作品である¹。この作品において、エリザベス・ギaskellは、個々の労働者には暖かい共感のまなざしを注いでいるが、しかしその一方で、その共感、同情を切り崩すかのように、集団となった労働者、組織的に結集した労働組合などに対してはある種の不快感、さらには恐怖の情を示していることはしばしば指摘されている²。

そこで、本稿では、『メアリ・バートン』に描かれた集団としての労働者に焦点を絞り、トマス・カーライル (Thomas Carlyle) の『フランス革命』(*The French Revolution: A History*, 1837)、そしてカーライルによる労働者階級の表象に強い影響を受けたと推測されるヴィクトリア朝時代の小説を援用しつつ、エリザベス・ギaskellが、集団としての労働者をいかに表象したのかについて検証したい。

I

カーライルは『フランス革命』において、労働者の集団、すなわち革命的群衆、暴徒をきわめて巧みに描いている。カーライルはフランス革命を労働者が蜂起した、「公然たる暴力による反乱、腐敗し疲弊した権威に対する……アナキーの勝利」³ととらえ、フランス革命の推進力となった集団は「パリの労働者や職工、困窮者」(*FR* 154) であるとし、労働者の革命集団すなわち暴徒たちを「怒れる国民的虎」(*FR* 154)、「火を吐く世界怪獣」(*FR* 165)、「幾つもの頭を持つ火を吐く」(*FR* 179) 怪物、(『フランス革命』180) と呼ぶ。革命における群衆、暴徒の解き放された活力、制御しがたい気まぐれな勢いは、洪水、波、炎のイメー

ジを用いて以下のように語られる。すなわち、「群衆があらゆる通りから潮のごとくごうごうと押し寄せてくる」(FR 160)、「人間の潮流はますます膨張する」(FR 161)、「生ける洪水の中へ(人波の中へ)と突き入った。バステューコは陥落した」(FR 161)、「暴民はごうごうと火を吐いた」(FR 162)、「怒りが発火した。暴徒の勢いはあたかも猛火のごとくいかにしても撲滅することはできなかった」(FR 235)、「人間の頭の大波が宮殿の庭にみなぎり、あらゆる通路に溢れ逆巻いた」(FR 236)と。ようするに、気まぐれで、不合理で、集団狂気に陥りがちな民衆、労働者の群れは洪水、火、野獣、怪物として表象され、あらゆるものをなぎ倒す潜在的な破壊力、無法と暴力を引き起こす残忍で凶暴な力をもつがゆえに恐怖の対象として語られる。

カーライルの労働者の群れの表象が、ヴィクトリア朝の作家たちに多大な影響を与えたことは言うまでもない。たとえば、ジョージ・エリオット(George Eliot)の『フィーリックス・ホルト』(*Felix Holt*, 1866)においても、労働者の群れは「人々は動き始めたが再びたかまり、どんどん高くなり、そしてついに以前と同じように叫び声とどよめきとなった。その動きは閉じこめられた洪水の動きだった」⁴と洪水のイメージで描写されている。チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841)におけるニューゲート監獄襲撃の場面は、『フランス革命』のバステューコ監獄襲撃を、そしてウォレン屋敷略奪の場面はチュイルリー宮殿略奪を明らかに模している⁵。この小説において、「群衆は集まるのも散るのも同じく唐突で、海と同じくその源泉をつきとめることは難しい」⁶、「二つの大きな流れとなってあふれ出した群衆」(BR 607)と労働者の集団は海にたとえられ、海と群衆の類似点は「定めなく気まぐれで一度怒ると恐ろしく、道理もききわけもなく、残忍であるから」(BR 475)と述べられている。ウォレン屋敷に押し入った暴徒の姿は「それぞれの突破口から群衆は水が吸い込まれるように入っていた」(BR 506)と、先に引用したカーライルのヴェルサイユ宮殿における暴徒の描写に酷似した言い回しで語られる。同じく、ディケンズの『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859)のバステューコ監獄襲撃の描写も「おそろしい喚声をあげて、この人間の大海は動きだした。波は波を呼びうねりはうねりを促して、やがて波濤は新しい岸辺にす

さまじい勢いで崩れ落ちた」⁷とディケンズもまたカーライルの描写にならって労働者の群れを大海のイメージを用いて圧倒的な筆力で描写する⁸。

II

エリザベス・ギヤスケルは、『メアリ・バートン』において、労働者の集団、労働者の群れをいかに描写しているか。カーソン工場の火事の場面、フランケンシュタイン博士の創造した怪物に関する言及、そして作品中に散見する労働組合に対する言及の三つの事項に的を絞って見てみよう。

まず、カーソン工場の火事から。火事を聞きつけて近所に住む工場労働者たちが自然発生的に集まってくる。彼らは「躍り上がって喜び、万歳を唱え……群衆に特有の移り気から、押したり、つまずついたり、のろったり、誓ったりしながら」⁹ 一体となって移動し、その姿、動きは「熱心な質問や、叫び声、うねり揺れ動く群衆の波のようなざわめき」(MB 91)、「身動きのとれない群衆は右に左に波打ちうねった」(MB 91)と描写され、先に挙げたカーライルやヴィクトリア朝の作家たちと同様に、たえず動き続ける流動体として、「うねり揺れ動く波」として表象される。この火事現場に集まった労働者の一群は、当然のことながら、暴力的な革命集団ではない。それにもかかわらず、フランス革命を推進した暴徒を描く際にカーライルが用いたのと同じ海や波の陰喩を用いて描写されていることは注目に値する。ここで、エリザベス・ギヤスケルがこの後、『北と南』(North and South, 1855)において、ソートン工場に結集した労働者の群れを波の陰喩を用いて「黒い群衆がゆっくりとうねりながら威嚇的な波頭をみせて、押し寄せては退く」¹⁰とか、女主人公のマーガレット(Margaret Hale)が労働者から受ける印象を「男たちの怒れる海」(NS 233)、「ゴロゴロとうねりながら残酷に満足気に響く怒りのつづやき」(NS 233)と描写したことを想起しよう。『北と南』においてエリザベス・ギヤスケルは明らかに、カーライルの労働者の群れ・暴徒の表象を意識して用いている。『メアリ・バートン』における労働者の群れの波のイメージによる表象には、偶然ではすまされないある意図があったのではないか。

カーソン工場の火事の現場は、「激しく燃える炎は、西へ西へと風に追い立てられ、勝ち誇ったように工場の西の端をおおい、たかだかと渦を巻いて燃え盛っ

ていた。炎はどの窓からも悪魔のような火炎の舌を出し、黒い壁を猛烈な勢いでなめ尽くした。……次第に高く燃え上がり、ますます激しく荒れ狂い、ごうごうと音をたてた」(MB 88)と描写されている。この場面は、ベンジャミン・ディズレリ(Benjamin Disraeli)の『シビル』(*Sybil*, 1845)やディケンズの『パーナビー・ラッジ』で暴徒が火を放つ場面と非常に酷似した表現を用いて語られる。『シビル』において、暴徒が食料品店を襲撃し建物に火を放った場面は「家の屋根に火がついた。家の内部で急速に火が燃え上がった。見よ、野獣の舌のような炎が壁をなめ尽くすのを」¹¹と描写される。『パーナビー・ラッジ』のニューゲート監獄襲撃の場面は、「猛烈な火炎が空高く立ち昇り、監獄の壁を黒く染め、高い堂々たる正門を燃える蛇のようにくねりくねってなめまわした」(BR 581)、「火炎が次第に激しさと熱を増すにつれて……暴徒たちも炎の渦の仲間入りをし金切り声や喚声をあげた」(BR 581)、「怒り狂って高く燃え上がる紅蓮の炎はごうごうとうなりをあげる」(BR 507)、「火が先の割れた長い舌で家の外側のレンガや石をなめている」(BR 507)と描写される。

『メアリ・バートン』の前半の一つの山場であるカーソン工場の火事の場面は、従来、経営者側の功利的側面(旧式な機械が焼失し、保険金が手に入り、一時帰休の口実を作る)を浮き彫りにしたり、ジェム・ウィルソン(Jem Wilson)の勇敢さ・高潔さを示す機能を果たすと解されてきた¹²。たしかにその機能は否定できない。しかし、カーソン工場の火事の担う役目はそれだけではない。ここでカーライルが激昂した労働者の群れを炎のイメージを用いて語っていたことを想起しよう。さらに、デイヴィッド・ロッジ(David Lodge)も、「群衆は放火することが多いので、群衆と火の間には換喩的なもしくは因果的な連結がある」¹³と示唆している。そこで上述の『メアリ・バートン』の引用の「ごうごうと燃えさかる炎」、「激しく燃える炎」は、くすぶっていた不満を解き放し、哮り狂った労働者の姿を象徴的に示していると解してもあながち誤りではあるまい。さらに、「ごうごうと燃え盛る炎の巨大な音は、やっきになってもみ合う群衆の金切り声や、叫び声、ののしり声の恐ろしい伴奏となった」(MB 92)という描写がいみじくも示しているように、火事と労働者の群れがパラレルに描写され、いわばごうごうと燃え盛り哮り狂う火事は、労働者が団結したときに噴出する凶暴な破壊力を暗示し、不満を抱き経営者に対して怒りをあらわにする労働者の姿そのもの

の具現化ともなる。

カーソン工場の火事が、当時の社会問題小説に描かれた暴徒による典型的な襲撃場面と見紛うばかりの表現を用いて表象されていること、そして先に見た、労働者の群れが革命的な暴徒の表象にしばしば用いられるうねり揺れ動く波のイメージでもって描写されていることを思い起こすとき、エリザベス・ギヤスケルは火事に魅せられて火と一緒に揺れ動く労働者の群れを読者に提示しつつ、実は集団となった労働者に潜む危険性、凶暴性を仄めかし、さらにはこの集団の労働者は一歩間違えるとみずから火を放ち、猛火のなかで哮り狂う革命の暴徒に容易に変わりうる存在であることを暗示しようとしたのではないか。

次にフランケンシュタイン博士の怪物に関する言及について見てみたい。中産階級の代弁者を任じる語り手は、ジョン・バートン (John Barton) のような労働者階級の教育のない者は判断をひどく誤ることになると述べ、「私には、教育のない人々の行動は、フランケンシュタイン 人間の性質は多く備えていても、善悪の相違を知る魂を与えられていない怪物 の行動に典型的に現れているように思われる。労働者は蜂起する。我々を怒らせ、我々を怯えさせる。我々は彼らの敵となる……なぜ我々は彼らをあのような彼らに、強い力はあるが、平和と幸福を求める精神的な手段をもたない怪物にしてしまったのか」(MB 219-20) と語る。実はエリザベス・ギヤスケルは、怪物とその創造者であるフランケンシュタイン博士とを混同し、また、怪物を無知な存在と誤解している¹⁴。ここで注目すべきは、エリザベス・ギヤスケルが、政治的に目覚めた労働者階級の人々を、中産階級の平安を奪う、無知蒙昧で、何をしでかすか分からない得体のしれない、しかしあらゆるものをなぎ倒す圧倒的な力をもつ怪物として表象していることであろう。彼女は『メアリ・バートン』の前半部において、ジョン・バートンのような労働者階級の人々が弱々しく無力なうちは彼らに同情的であり、彼らが抱く不満と反抗を読者に理解させようと心を砕いた。しかし、彼らがひとたび政治的に目覚め、徒党を組んで政治的発言をするようになると、彼らを自分たちに刃向かう敵、周囲のものをがむらしゃらに押しつけて進む怪物として退けるのである。

最後に、労働者が結集した労働組合について。「組合は一つのおそろべき力となる。それは蒸気の強力な力に似ていて、良いことも悪いこともほとんど際限なく行うことができる。しかしその働きに天の恵みを得るためには、激情や興奮に

左右されない強靱で聡明な意志に導かれなければならない」(MB 223)と、労働組合は産業革命の進行とともに台頭してきた恐るべき推進力をもつ蒸気にたとえられている。蒸気で走る汽車は、ディケンズの例を挙げるまでもなく、障害物をすべておしのけ、一直線に推し進む激しい力と速度をもつがゆえに当時の人々に恐れられ、怪物として表象された。小池滋氏が述べているように、鉄道は「煙を吐く鉄の怪物」、「真っ黒な煙と火の粉を吐いて突っ走る悪魔さながらの機関車」、「憎むべき怪獣」、「盲目的破壊のシンボル」、「死と破壊のシンボル」、「危険な民主主義化、人間の平等化のシンボル」となっている¹⁵。盲目的破壊の象徴である鉄の怪物の恐るべき動力源は蒸気である。蒸気そのものも、強力な破壊力をもつ怪物のようなものと捉えられていたことは言うまでもない。ここでも、エリザベス・ギヤスケルは労働組合を蒸気として表象することによって、そのメンバーを善悪の判断がつかず、激しい激情に駆られて猪突猛進に突き進む怪物のようなものと認識していることを暴露する。エリザベス・ギヤスケルの反組合的偏見はきわめて明瞭である。当時、労働組合はほとんどの中産階級の人々によって、その目的は革命、その行動は暴力的とみなされていた¹⁶。その意味で、『メアリ・バートン』における労働組合のこのような表象は、中産階級の人々の労働組合に対する不信、恐怖、不安の念の具現化であると言えよう。

III

以上、エリザベス・ギヤスケルは労働者の集団・労働組合員を、無定形でうねり、流動しあらゆるものをなぎ倒す破壊的エネルギーをもつ波、猛り狂う紅蓮の炎、創造者に刃向かう善悪の区別をつかない無知な怪物、そして恐るべき推進力をもつ蒸気として表象した。波、炎、怪物、蒸気どれも制御しがたい破壊力をもつものであり、恐怖心をかきたてるものである。では、労働者の群れをこのように表象しようとした背後には、いかなる意識が隠れ潜んでいるのか。先に指摘したように、エリザベス・ギヤスケルは一人一人の労働者の生活を同情的に、共感をこめて、そして洞察力ある筆致で描いた。しかし、労働者がひとたび自己の権利に目覚め、権利を主張し、組織的にであれ、自然発生的にであれ、団結して実力行使にでると、とたんに彼らに対する彼女の態度は硬化し、彼女の同情、共感

は不安、恐怖に変わる。

労働者の集団的行動をかくも恐れるのは、デイヴィッド・ロッジの指摘を待つまでもなく、1840年代当時まだイギリスに生々しく残っていたフランス革命にまつわる陰惨な記憶であり、さらにはイギリス各地で多発していた暴動に触発されて第二のフランス革命がイギリスにも勃発するのではないかという不安、恐怖のゆえであった¹⁷。かくして、エリザベス・ギヤスケルにとって、労働者の集団的行動はアナキーと暴力に通じ、その集団的行動のもたらす結果は革命と思われた。そこで彼女は『メアリ・バートン』の中で労働者の集団を、波、炎、怪物、蒸気として表象することによって、革命の危険性を中産階級の人々に知らしめ、警告を発することによって、革命を未然に防ごうとしたのではないか。

* 本稿は、大阪女子大学『女子大文学（英語学英米文学篇）』、第4号（2003年）所収「『メアリ・バートン』における労働者階級の表象」と一部重複するところがある。

注

1. Enid L. Duthie, *The Themes of Elizabeth Gaskell* (London: Macmillan, 1980) 65.
2. David Lodge, *After Bahktin: Essays on Fiction and Criticism* (London and New York: Routledge, 1990) 103.
3. Thomas Carlyle, *The French Revolution: A History* (New York: Modern Library, 2002) 178. 以下、FRと略記。
4. George Eliot, *Felix Holt: The Radical* (Harmondsworth: Penguin, 1995) 312.
5. Lodge 111.
6. Charles Dickens, *Barnaby Rudge* (Harmondsworth: Penguin, 1973) 475. 以下、BRと略記。なお、小池滋訳『バーナビー・ラッジ』（集英社、1990）の翻訳を借用したところがある。
7. Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (Harmondsworth: Penguin, 1959) 245-46.
8. Michael Goldberg, *Carlyle and Dickens* (Athens: U of Georgia P, 1972) 120-21; 松岡光治、「『二都物語』における流動性 革命の不可避性と時間の不可」、『イギリス小説ノート』（1994年）第9号。
9. Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* (Harmondsworth: Penguin, 1970) 92. 以下、MBと

略記。なお、直野裕子訳『メアリ・バートン』(大阪教育図書、2001)の翻訳を借用したところがある。

10. Elizabeth Gaskell, *North and South* (Harmondsworth: Penguin, 1973) 226. 以下、NSと略記。
11. Benjamin Disraeli, *Sybil or The Two Nations* (Oxford and New York: Oxford UP, 1981) 379.
12. W. A. Craik, *Elizabeth Gaskell and the English Provincial Novel* (London: Methuen, 1975) 45; Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber and Faber, 1993) 197.
13. Lodge 107.
14. Chris Baldick, *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-Century Writing* (Oxford: Clarendon P, 1987) 86-87; Roger S. Platizky, "Mary Barton and Frankenstein," *The Gaskell Society Journal* 10 (1996): 83-84; Deirdre D'Albertis, *Dissembling Fictions: Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text* (London: Macmillan, 1997) 54.
15. 小池 滋、『英国鉄道物語』(晶文社、1979) 39, 74, 78.
16. Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell* (Boston: Twayne Publishers, 1984) 11.
17. Lodge 102.